

論 文 要 旨

〔Potential predictors of susceptibility to occupational stress in Japanese novice nurses - A pilot study〕

沖田 信夫

【序論及び目的】

- ・職業上のストレスは労働者が離職に至る一因である。職業上のストレスの傾向がある人々を早期発見することは、離職を予防するために重要である。
- ・本研究では、雇入時健診項目や、生活習慣、尿中ミネラル物質が、入職後のストレス感受性を予測する指標となり得るかを検討した。

【対象及び方法】

- ・2015年4月に鹿児島大学病院へ入職した女性看護師で、研究内容を書面で同意を得た62名中43名(平均 21.9 ± 0.6 歳)を対象とした。入職時検査として、職業性簡易ストレス調査票のB項目(ストレスによる心身反応を評価)と生活習慣調査、尿中ミネラル(Na、K、Cl、P、Ca、Mg)、雇入時健診データを用いた。入職後検査として再度職業性簡易ストレス調査票B項目への回答を求めた。B項目は、5段階評価の換算値を用いた(値が低いほどストレス状況が悪い)。検尿項目は尿中Crで補正した。統計処理として、単変量の相関分析にSpearmanの順位相関分析、Mann-Whitney U検定を用いた。相関の強かった項目については、多変量解析を実施した。

【結 果】

- ・43名中42名が入職後にB項目値が下がっていた。
- ・単変量解析において、B項目合計値と有意な負の相関を示した項目は、雇入時健診項目の収縮期血圧と尿中Na排泄量であった。生活習慣においては、入職1年前の体重変化が大きい群と就寝前2時間以内に夕食を摂取する群が、有意にB項目合計値が低かった。
- ・多変量解析では、尿中Na排泄量と生活習慣2項目がB項目合計値の独立した説明変数であった。

【考察及び結論】

- ・入職後にB項目値が下がっていたことから、仕事そのものや生活環境の変化で、ストレスによる心身反応が悪化した可能性がある。
- ・縦断的な観察研究において、雇入時健診項目の収縮期血圧、生活習慣2項目、尿中Na排泄量は入職後のストレス感受性を予測する指標となる可能性が示唆された。
- ・生活習慣2項目(入職1年前の体重変化3kg以上、就寝前2時間以内に夕食を摂取する)と尿中Na量は、ストレス感受性と栄養摂取の関係において重要な意味を持つかもしれない。
- ・雇入時健診項目、生活習慣、尿中ミネラル物質は、入職後ストレス状況が悪化する人を予測する指標となる可能性が示唆された。